



毛の書

遠近
467
8 上



遠門  
467  
卷 3

浪花梅後篇園曙下之卷

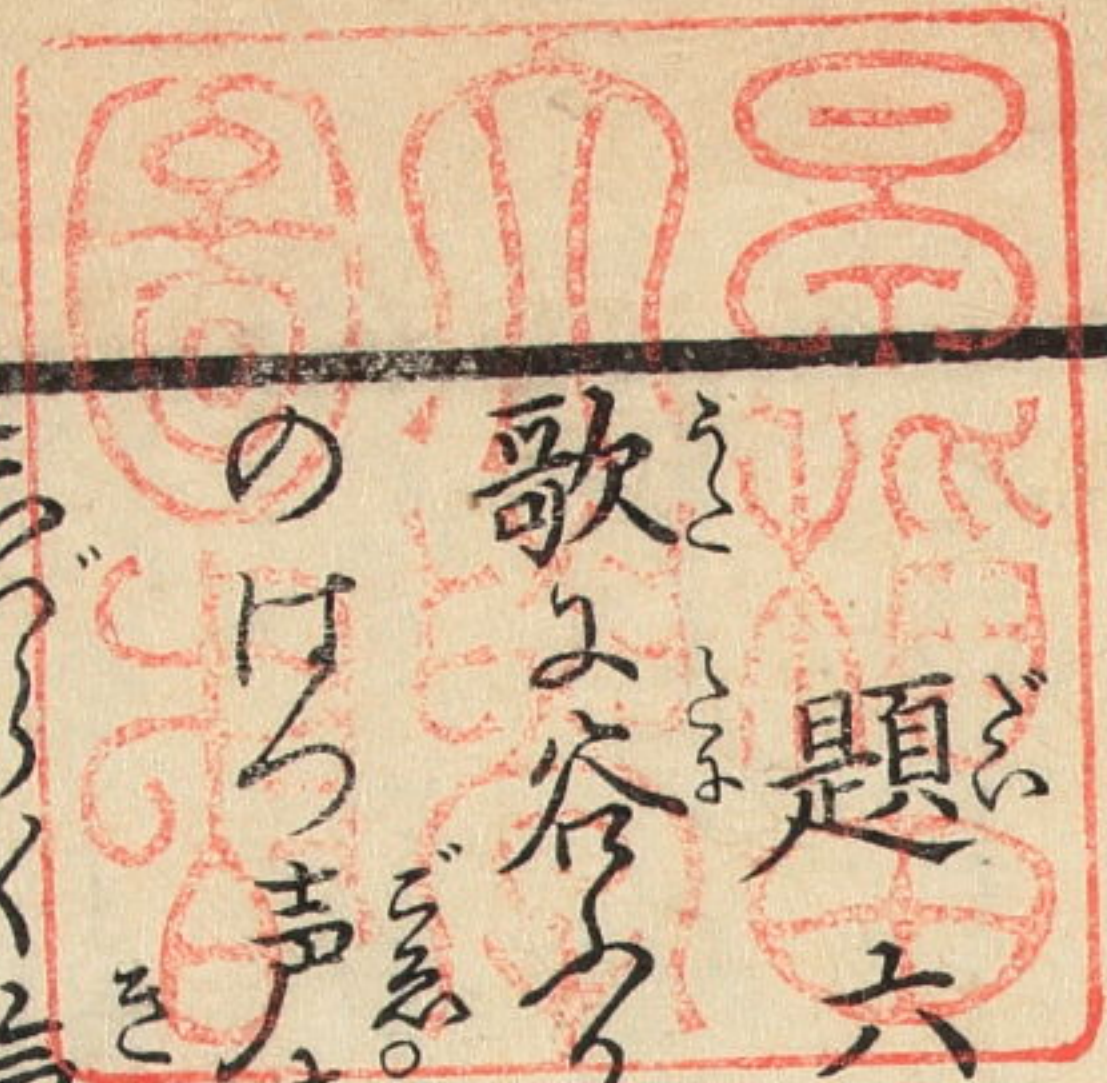
長嶋町五丁目  
大野屋惣八

東都 梅暮里谷 著

題六

舊巢鶯

歌よ谷々々うらやま古巢ふるすあゝみうぶみ嘗なのゐのるやのかののうまま  
のけらの声こゑささここもも添ぞ十じ鳥と々々みみ井いののううららんんかかととさされれ  
ああららくく気き絶ぜせせーーがが白しろ髪かみららるる翁おきなささららててははああへへ  
手てととららええんんゆゆくくとと夢あむささめめららるるおおととくく息いき吹ふ  
かかへへららううつつららくく心こゝろよよあありりああややうう打うち擲ちののらら井いの



うらへ落さぬしやぞん岩へーが井りとぬる水  
 もあー。されどそそ日頃信心あきて住吉のあん神手  
 引あーあめめのみやと弄ひ。や拜ましくたさうり  
 足道ハ果たきよと穴猛獣のすみりあもせよ行て  
 ともやとぞんく歩をよとむび。二三里も来りしと  
 思ひしころ。遙向ふよあふとちり。明くそゆとをを  
 カとて移さつやとた上うの小坂あり。もや日のわ  
 もとぬれば心うましく。急ぎ移さ四方をさうと見

廻せと廣大ある庭ありけり。あつめて再うあつて  
 ほづめて間道ありしやと志まう。細き涙まふ衣ようの  
 めのを洗ひすたまる女子あり。鬼が岩屋ともひひ川  
 へこと。不審とふあひあう。かこりしへ移る互り  
 かどろ丸 **源十** あん身まか千代よあまや **あよ** 源十身  
 こやあやと思ひつけあき所あて逢るるあまはど  
 かんまねど。あがし切もあししが **源十** いらあそあて  
 はあへの来りしと問まそ。か千代ま泣くもはあへ

園 暁

一〇二

捕とらひてしわけ洩めさまで詰つまらして源十舟げんじゅうふねがは家あやへ来きり  
 一ひと度たびを尋たずねむは源十げんじゅうの主人しゅじんの形かたち糸いとのせんさく何なに  
 と免とれぬあはは家あやの容よう子こあるけむは按内あんないして主あやよ  
 逢あせくまよりしと。か千代ちよを先立さきだてて主あやの居間かまへと  
 去いのび行く。あふよと花形はながた源次げんじ兵衛べいゑとゆへありて  
 命めい全ぜんく。今いま大坂おおさかの市中いちぢうに住居すまひしけるが。今日けふは家あやの  
 新あらた刀やいば古ふる刀やいば数かず多く月並つきなみのぬくひ日ひとて出入でいりぐのたゞ  
 庭やのまぢめふより。素もとよと母このむ所ところといひよと心こころあつうの

品しなよ似によりたるものと。あふむらうらふ中なかつわく。道具屋どうぐや  
 といふあつうの。去い院いんより所の通とほり案内あんないすも退屈たいくつみも  
 あつう。庭見物あはせんぶつのすべしと。い捨すてがとへ去いる後のち  
 良父ちちし待まちむびくばやと庭あやまかり立たて一見いちけんするま。  
 高たかくねども連山れんざんあり。細こけきども流水りうすいの清きよさあり。  
 四季しきの草木くさき小目こめを歎なげせつめめめ身みの鳴なのこ。実じつり  
 深山しんざんよ異いあつうとあんとて。たましく爪つめ又また薰かほる  
 えあつうね白しろひと山やまのあつうとあつうを床あししは家あやの有あり

けりやと尋ひ終。真芝垣の外より何となく現きまれ  
 ども障子を穿りて入るるぞ。立れらんとするは女子  
 の声もぞやぶあざう。待てよと云ふ昔更もやと立よと云ふ。  
 左もあはぐ何う二人のめりつをせゆよ。モウよと云う  
 めそろと肩のあうをさすうと云ふ。舞ハイク撫アヤウ  
 どもわらうと云うやうと云ふ。おひらるうと云うやうと云ふ。  
 免ののう其やよよと云う孝行よと云うと云うものを撫う  
 やうが悪いあうと云う飯をわめるも我俵つが子母と云うと云うが

あうと云ふ。何うふつて心ほらひとせまきもの。元々と云う人の妻  
 が罪。現在あらくあきと云う。金取をせと云うと云うつね。と云う  
 別れの種と云う。其あうは家へ二人が捕りま。ゆと云う  
 必抱ゆ能さうと云うやと云う気味と云う。城のむあうと云うと云う  
 必もあうと云う。うらむと云うの我やと云う。何と云うと云うと云う  
 寐の枕へはくふ泪川せ死と云う身小積多くて此盲目  
 神や佛の助よと云う。是非一と云うと云うと云う。吾夫や係十身  
 必一と目あひ其のち死バ惜まなう。毒が薄きと云うと云う

泣き泣けてぬるまじと又さあくと泣目エ、ひんるまじとひ  
 出して。さあさやそ小泣せしんは是もあつ。うら妻が罪どふぞ  
 愛相つらさどそ中での愛う。わんどうそそ世話しそ  
 ころのふ負も泪もろくそあつとあつとも共みあつこ  
 られて **愛** 愛おつらさび世話せよの惜まは命のと愛  
 らぬ母う人の捨て行とんか慈悲やう。わうの邪  
 見と怨わしとつあとばうう小泣伏バ **愛** 愛おつらさ  
 愚智うさあう。堪忍せよやと脊中とさあう。うらの

愁歎あつく世。外面よさうとる源次妻。妻や娘のみの  
 ぞよよく似ておまバ猶さふ不便やう。泪をわくひ  
 後の方をりくれバ。是も垣根よ身とよせ。供よとら  
 さく去まう男あり。つあけつとと退くとはあさわ  
 愛へあひひ泣。それとあへる人うげよ致傷くひあう。小見  
 われを顔。是もあしを声をおけ **源** 源次 且那 且那 且那 且那  
 中世ぬら **源** 源次 其方と正しく源十郎 **源** 鎌倉へ下りし  
 子と早速かうら子やせし小且那 且那 且那のあん身の素より

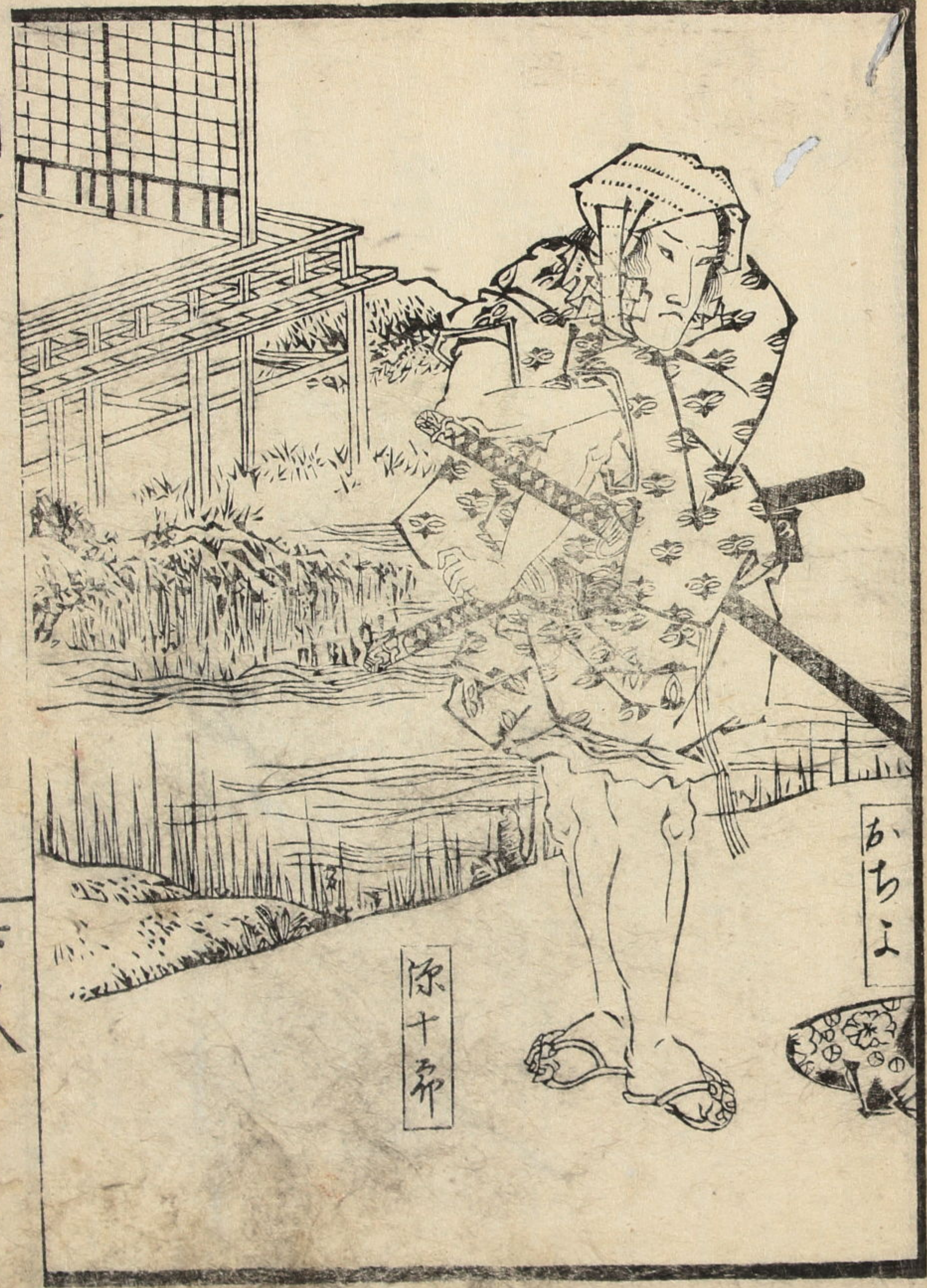
濱名のか家も志まらざらむ。さそふか討まらざらむ。更と  
 力あつく唱る念佛。今ゆるりゆくもは家小して中挿短き  
 中尊顔なるも優曇華の花。浮木の亀はく人も死  
 必悦と誠あゆりそ共びなき。涙次去来も感涙を。源次  
 今までも命あつくて再び對面をまらけり。作馬が忤執負  
 ありぬ父の送出をややく守り中く昔もあつくてハ刃切ふ  
 更まらそあつく昔と父も師匠とも尊教するまらけり。捨  
 只流戈の奥戈のそ手をとるまらけり。教るやて又あ家小

来りしん出入の者まらやより。新古の名劍見物せん  
 とめ。シテヤと汝あ所へ来りしりけり。何あるぞと尋ね  
 泪あぐろ小源十舟。源十舟播州を中出立の其後  
 々仰せのまらけり。討まらひて中出帆をかまらけり。供よか舟  
 みのんとする小奥さるのか志まらぬの取て来りまらに六人  
 さ中。船めり共よ初衆あつく。あつく人走りは方へ戻り。さ  
 し廻まらと志まらぬも道理海城のまらぬ捕まらぬと。  
 笑と時の口が。濱辺へまらと腰もねけ。非人とまら

まうり。艱難辛苦新町の。一部始終を洩るくも培  
 るあるを人のある。障子さうらと引あけてうけ出る  
 盲小付とふ娘かどうたえある二人の者源次ヤアとちや  
 か雪であつた源次さふか声々吾夫う八重爺々えか徒  
 でいざんしつ源十奥さふか娘さふらうは安泰でうし  
 ちこと嬉し涙の男位互まつらう一方の必ひあつた富  
 士川の雪解もわくとあつたわらう。ちありて源次と八重  
 救年うらけてちうぐふねあつたねばあつたその目と心

日と定め。妨帛をさきて夏や。我存命であるを凡の便  
 よまうらう。さうら悦びあつたとあひひあつた日とてわら  
 形も一度は對面を。ゆが縁みの尽ざる共び道々  
 ぬをあらう。もさうら立さう自然の導さめめうとて  
 漂言の一ちく曾よひぐくも理。ゆが苦勞とせし夏ぞ  
 目うひもさふさふが嘶が耳ふとさうてかどう胸あつ  
 りも爰へさうら出で。絶てた對面のうまうとめめひ  
 あつたものさう。見ると叶いぬけさうら宿世の因果





かちよ

源十郎

ちよどぎく  
 處女賊の家  
 小ころこして  
 情人の再會  
 を



ぞやと娘かやえり共く小泪をまゐる四ツの袖あがり炊き  
 小時と危うつる大老そのか目こそ即坐は愈させやさんか  
 安うと此家の主太舟左門小壺ぶらぐ人立物かゆらぐ  
 や人よあざし大翁やしく手よ入る此良薬の服用あそ  
 びとま立とまらよ眼病平愈おんと疑ひやイザ  
 とすおむすめ娘をいそぐよとひて手はとりとて飲ま  
 且おんぐや心神脳乱してあがく苦痛のありさるん  
 コいりぞとあんど人か雪と苦とさるよ志おんがひつ

一のひくく目の光光焼しや奇業の功も。れこのぞく  
 小いえらるる主の恩よとらおん捕る其目より覚悟よ  
 ちふ取扱ひもんあおん城の情もや今日よりある吉日と  
 人への負おんを承りし初おんをひくく目のうち小悦び泪  
 のさおんれとらる人々奇異のありひとら源次りる家の  
 奇法よや。く即功のありける類おんもよる各業をやと  
 称おんとバ源十郎も共く小感心されと心おん怒り海城太  
 舟おんめおんはおんしおん人救年艱難させらるると引とて入ておんをく

ありんとあそぶも主人とまをてりて今目ち良業  
 少音方か目とひく死し恩人りのつちやと扣入居る  
 太帛を工の目よ浮び。泪を垂べとうちをくひ天の  
 思ひ出せん先のと。高砂の船場を。網をう鳥を待  
 ありう。丁度船るよ雇ひて。人な死島への夕えんで財  
 宝を奪えんと心よ去るがユエ。あふくは若人  
 もづんめとあふと死忘るのとて久きとてさるまじと  
 漕舟を仲中。泣つくど死つ微運のく言あまくあま

ばまろがせし。濱名さるの子息よ敵みあけ身を  
 くら。村まよかあまらるる情の世の中と悔さあ  
 あふか詞が耳よとらう。苗ままが。ぼくすはつみん身の  
 う人戒りてかどろけども。今さう何と詮さる。つちを此  
 身の終を明し。かろ安んといく度うあひいごと  
 願ひあ。身の無道のまらむ。蟻の穴より破る境を  
 あまら余処くま。一丁の中へあまら。始がは  
 尚さる。鬼住岩屋とかとろく。あまら。とろく

目ひ小くこままるる凡ご愁しう歎たん遂すいはは音おんととささままもも我わが罪つみありと  
 心こころののああららびび神かみやや仏ぶつもも憐あはれみみててやややや死しすす手てにに入いるる眼がん科か  
 のの大おほ秘ひ書しよととささららるるとと熟じやく見けんままささがが常じよう卵らん紫し雪せつ四し辰ちんととるる  
 るる男おとこ子このの生なま膽たんはは三さんツつのの品しんををもも服やく用ようささるる付つききののるる  
 難なん治ぢのの眼がん病びやうもも立たちち處ちよよよ平へい愈いよままるるううごごひひあありりととああるるをを  
 ええてて天てんへへののわわるる心こころ地ぢららややりりくく手て小せう入にゅう奉ほう一いつううととささららるる其その  
 かかひひあありりててひひけけららんん眼がん源げん次じホほウう紫し雪せつとと莫もく金きん救きう女にょ  
 ととららるる煮に枯こめめてて菜さい氣きととあありりててととららるるととららるるととららるるととららるる

豪ごう家かのの菜さい店てんもも狩しゆりりののりりととささららるる其その國こくのの守まもりりととららるる  
 所しよ持ぢままささららるるののりりととららるるととららるるととららるるととららるるととららるる  
 めめるる辰ちんのの年ねん月げつ日じつ時じのの男おとこ子このの生なま膽たん一いつ人にんのの売うりりととららるるととららるる  
 人ひとのの悲かなししみとと何なにもも人ひとをを便べんみみとと同どうままてて主しゆるる泪なみだととららるるととららるる  
 幼こああららととささららるる別わかれれるる血ち肉にくををけけららんん弟あにのの生なま胆たん源げん次じややナなントんと  
 源げん十じゆ海かい城じやうととのの憎にくみみががささららるる故ゆゑああららんん身みのの素もと性じやう大だいととららるる  
 かんかんねねああららずずとともも今いま日にち滿まん頭とうのの時ときののささららるるととららるるととららるるととららるる  
 非ひ義ぎ非ひ道どうああららひひままららるるややららけけいいがが仕しららんんととららるるととららるる

遙とほ下くだりて両手りやうてをつれ私わたくしわを濱はま名な作しよ馬まが下部しもべ袖助そですけと  
 中ちゆう若わかしよ主人しゆじん佐さ久く馬まか家けの重ちゆう宝ほう茶ちや研けん藤とう四し郎らうのしやう刀とうううく  
 所ところ望のぞめしに承こせう引ひつととろ折ちりわししく一いち刀とう紛ま失し  
 その夜よ落おちるる出で付つがううこがひひかかるる始はめめととろろ。寛ひら狂きやうのけ汚が  
 名なも我われああままささごご腹はらううささがが死しんん絶たとと一いち念ねん決けつするるその  
 手てととろろ人にんレレ早はやややりりてて犬いぬ死しままるる左ひだりややどどももひひららままるる。  
 我われよよかりりてて一いち刀とうをを身みをを粉こなみみでで死し絶たええどどよよ其その一いち刀とうのの出でぬ  
 ううららのの死しををとともも汚か名なととままええややどど。乃すなはちちののむむくくががああままととろろ。

恩おん徳とくああるる市いち主しゆ人にんのの生せい害がいををままるるそのその悲かなししとと口くちかかししととせせんん方かた  
 ああままささままるるのの一いち刀とうのの出でぬぬハハ昔むかし手てををああららてて弑ころせせししをを  
 同どうおおとと身みををつつききおおししててのの捨すささくくハハああるるひひとと道みち具ぐ屋や研けん  
 師しととろろ。又また々々海うみ賊ぞく夜よ盗たうのの業わざぬぬままたたららるる劍けんのの中ちゆう笈ふく  
 一いちとと似によよりりのの品しやう々々とと幾いく度どままもも似につつるるぬぬ品しやう我われ手てのの若わかしよ  
 とと四し方かたへへままりりととせせ尋たづねねああららててかか引ひよよせせららるる盜たう賊ぞくとと一いち目め  
 ままるるととろろ鼻はなとと耳みみのの黒くろ子こがが血ちままららのの燈とう提てい我われ家けにに生なるる  
 めめ。つつららるるつつけけりり知しれれぬぬどどもも極きよくりりてて耳みみはは黒くろ子こをを生なははるる

同書

下

四帛の刀より。無実と死せし我主人の盗人々弟と云。  
 因果をわづら寄る車どろで重荷の罪障と討ねが  
 ろうね仇敵兄弟と名のり合はれど殺さんとかみま  
 のやまろふも兄よ弟とよまらば未練もあらもかろくま  
 物わらげらるるひ夏もさるねうしとやわけや水もよ  
 らざどやう村源十さうふるふと云知れどして款のよろよ  
 かぞく今さう何とも面目あり源次よめり死候名  
 の家僮丹誠心苦のういあつて葉研及四帛の一刀をん

身の手小りりらやををまを主人へちひのぞく手小  
 入るま主人より。かろくしやさん。ヤア若旦那葉研  
 及四帛の剣イガハ持泰と呼らまべ一ト万の襖が用  
 ころやくし持考。佐久馬が一子候名朝負源次系  
 があまうかきカ登此不どらあがく言教と拜は後方  
 志まねるやとあがくわさま。さどじかあん下されり何  
 どむ亡父の家僮袖助がらうしひイサか精取をさる  
 と。差出せが源次系手小らわけ源次やろくかどる死我

重室夜四序の刀入相違あり。泉下の佐又馬も弄び  
 つんと目ふら泪此刀火みこそ多くの人の憂えん。  
 火が仇あるは刀と心の中小人くの恨もこそあえ  
 けまと歎息。まこと太舟左門も切ひ。切く僕の高祖  
 を股み七十二の黒子あり。龐儉が父の黒子をあるは夫  
 婦の名乗をとる。その外は子死例を多し。今汝が家ふ  
 生るるめ。まゐりて瘰を生るとは。まゐりてめひめは  
 り。我先年子死を愁ひて。山城梅のまへへ赤菟なり。

一七日満願の夜。あつらをまゐらば友人のまも祈願と其  
 まゝにらめふも。まゐりて三人の枕辺。あつら捨子の三人の女子  
 目さめて奇異のあひをま。三人よりて三子をとりて。  
 まゝハ一對の王をもあざむく。美孺さ只のまゝ。まゝ三人が  
 耳の瘰も一ツ所。まゝとまゝもあは。三ツ子の兄弟。何方の若  
 の子ありん。音もひ。あつらありて。まゝを捨りて捨り。  
 けん捨らま。子の泣やむ。まゝ乳の夢をま。まゝん  
 餘念もあ。ぬ寐負の不便さ。かろる。まゝの授。子必

実子と養育ありつる縁者のちりひしては年月音  
 一が汝が家小生るる若耳は癒のまゐるなり。若やと  
 心より誓を破りて娘の身のうへに太のる二人を取あげて  
 誓のとうり音しん播広の国を間郡兵衛今一人を  
 當国の富田屋徳空門といひつべし源次左やま委くあり  
 たる太ホフホやんの右手下の若の告るふの若と未  
 いかやえとの小菰量恰母年ろめどろ多も耳の黒子  
 まで寸分たぬ二人の女子と吹つけ誓は菓くふ熱を

ぬきもせいで捨と子を拾ひわけたる親とちまで調をせと致  
 子火の闇三人貞をあせせんとさ又ニツみと頼とくくり  
 くる其縁は結ぶ身小とわくさまでせめての厚さか礼を  
 て下の若小云つけ二人の女子をほとせとせう。いけつは未は  
 指揮をまはハツ答て次のるより小猿の浜六先よとの入  
 の女子をほと未くる。は花太夫とうたふらむに源六  
 さん何是や。そとを連てむやう小治公とせと受  
 して只の身でもあやう小邪見は二人が中さのてと目の

源氏物語

二ノ五



かりおるもみさよ。あふ理ふは場のやうす。源十舟え  
 もわろくがなふし。小もい。うふ。度ありくさすよ。  
 ナゼあるして下さんせぬ私。あまねるうと。覚悟して  
 心の中を不佞とありてあらまこと。わろうの人にもえ。うらま恨  
 うろも道理あり。源十舟をばくくと。今小玉。やそ不審  
 けとと。か。う。む。む。か八重のわがやく声うけて。アかやへを  
 姿形を流手やう。ふのむ。ど。た。う。ふか。ま。る。る。む。は。を。さ。う  
 かりやろろかやえさ。む。は。二。親。も。と。も。く。小。ご。う。う。た。と。せ

は始末と。あが。わ。れ。う。ま。ろ。う。小。ぞ。大。き。く。せ。と。ひ。久。よ  
 と。此。花。太。夫。を。襲。す。ふ。源。十。舟。の。ま。ま。み。は。り。が。私。が  
 兼。相。を。ろ。う。小。て。か。や。え。よ。う。れ。川。と。け。の。勤。め。を。せ。何。と。ひ。規  
 わんきこと。うらああるま。が。李。其。か。ら。う。つ。つ。ひ。と。此。無。用。之  
 金。と。り。か。と。の。間。ち。う。ひ。ま。か。ひ。て。承。知。仕。る。弟。が。身。の。か。ろ  
 より。此。も。ろ。が。身。の。う。人。ま。で。具。ま。志。と。へ。し。る。ま。ま。が。小。猿。よ  
 といつ身うけり。せ。ろ。由。安。堵。わ。ま。と。速。ろ。と。死。間。郡。系  
 富因を徒。空。門。先。より。次。よ。ひ。久。く。が。は。求。の。手。代。の。案。

同書

下六



國書

源十郎

うむ



國書

人間かゝるて  
羞べし野干  
とく恩せや  
ぞり

おちよ

内にて此所へ伴トカはやくしトカを尋ねさせば。とて久と娘の  
無夏。恙トカはたさるトカ小対面トカのようトカとびまトカあトカくトカ互トカ祝トカいトカ。  
源次トカ云トカ衆トカと不審トカとトカ源次トカうトカやトカ落トカわトカふトカ今日トカの始トカ  
源次トカ云トカ身トカの方トカより呼トカ状トカ也トカ。徳トカ我トカをトカ同トカトと娘トカのトカ  
がトカ志トカぬトカ人トカ其トカ夏トカぬトカと取トカ史トカどトカつトカ来トカて娘トカのトカ  
喜トカぶトカもトカまトカ人トカ身トカのトカあトカけトカ。源次トカ云トカ衆トカハトカのトカゆトカめトカくトカ  
あトカとと小首トカをトカうトカとトカ。大トカうトカくトカとトカびトカ寄トカらトカるトカも拙者トカが  
謀トカ出トカ。源次トカ云トカ衆トカとトカこと手トカをトカうトカらトカ感トカぜトカらトカ。源次トカ云トカ

まてトカとトカくトカをトカつトカりトカ。縁トカより引トカらトカけトカ対面トカのトカとトカあトカれトカ手トカ  
とトカのトカとトカんトカくトカ。智量トカ勝トカてトカ。女トカがトカ胃トカ中トカをトカ通トカくトカつトカまトカ下トカ部トカ  
の奉トカ公トカとトカとトカ救トカ女トカの子トカとトカふトカとトカも育トカつトカるトカもトカ死トカハトカありトカ  
あトカらトカうトカ三トカ人トカの美目トカ。女トカ子トカ捨トカ心トカのトカいトカやトカうトカとトカよトカとトカ  
向トカきトカてトカ今トカとトカうトカ面トカあトカくトカも大トカうトカ。僕トカめトカハトカ貧トカきトカ農夫トカとトカんトカくトカ  
薄命トカうトカらトカうトカとトカ継母トカとトカ道トカをトカたトカてトカ恵トカめトカどトカも昔トカ夏トカ味トカゆトカとトカ  
仕トカつトカとトカあトカらトカくトカ。弥トカがトカうトカへトカ三トカットカ子トカをトカ生トカてトカ妻トカとトカ難産トカよトカとトカのトカ  
相果トカ三トカットカ子トカをトカのトカとトカ。は身トカの當惑トカ入トカの門トカよトカひトカらトカの乳トカを



めろ声こゑを千人せんにん力ちからで引ひく如ごと地ちを道みちうとうあげ位ほどやむよう  
 す。ヤレ嬉うれしやとこの場ばを去さうが。や。此こゝの縁縁で親おや子の  
 ちるも必かならず此こゝ恩おんを忘わする三人さんにん三人さんにんらんうかや人が産うの親おや天あま  
 イヤ親おやでこの父ちちを制せいし母ははの慈あはれを育そるこそ室むろの親おやの道みちなる  
 小こもごをこみて捨すてる非ひ道みち親おやうひもるこそ親おやが他人たにんと  
 ありて一ひとツの如ごとひ花はな形かたち源げん次じ云いふかゝる届と下くださうとや  
 源げん次じホブ其そのわがひひやをむかひ娘むすめのやえと云いふ親おや負おふ縁縁  
 組ぐみり天あま晴は明あ察さ。さう娘むすめあそへ縁縁組ぐみも主あ従じの必かならず  
 組ぐみり天あま晴は明あ察さ。さう娘むすめあそへ縁縁組ぐみも主あ従じの必かならず

もやまど神かみのさるけしあるこの世よ実まこと女むすめ鞠まり肩かたさゆへ縁縁組ぐみ  
 下くださるが互たがひの友ともおちとありて聲こゑよ舅おやぢと睦なごさを叶か葉はの  
 づいてはらじとさるが主人しゅじんのさうとびはう人ひとやあるべき  
 と泪なみだうらうと低ひ頭かぶ平へい身みのひ入いてを願ねがひける源げん次じ吾われも左ひだりを  
 ぬく之これ衣え衣え童わらわ源げん十じゅう帛ひらよもくする妻つまさんと云いふさうせし  
 早さうと固かたの盃さかづきも濟すまむが汝なんぢがうま任まかせし天あま早さうも願ねがひ  
 とかさうすも若わか且かつ那なもかようとびと君きみの言こと矣やもさそや嫉ねたむ  
 ちりゆさんと弄あそむ勇ゆうめ人ひとも花はなさく空そらのそまゆくそら。

晴はるやぬのか千代ちよが心子こころやぞ身み脏け妹いのかる。あふ  
 るよの横よこ慕ねがとどひまをせど胸むねの修しゆ羅ら齒そとをくひしめて  
 泪なみだあやう袂たもとを貞まことあて。あつとやしてぞ泣な居ゐる。郡ぐん  
 去い来きを源げん十じゆ身みが例れいへより約書しよせうしやうふまわんけきども。  
 委い細さいをいつがん身みのふもと。苦く海かいの勤ととめ殊ことも身みらる  
 かん身みの種たねかやえどの手が切きまが維いみ遠えん急きよもあひ女によ  
 房ぼう源げん次じを衆しゆぶのあまうすま下くださるべしと親おや子のようをび。  
 源げん十じゆ身みの般はん心しん熱ねつは身み不ふ肖しやう某たがひをさるぞもあひ下くださると有あり

かくの存ぞんまきまど主人しゆじんへさげし此こ体たいおこしづふ肌みやれ  
 しの強つよやせしあまの露つゆあまづ心こころは是こゝあづくと取とる  
 つぬ挨拶あいさつ。此こゝ花はな太た夫ふうのきき此場ばのこゝ情なさけ  
 云いのそ。今いまさうさふむつらねと脈こゝろもら泪なみだもしく側そばよ  
 る目めもあつと受うけ別わかちつけろ。トるのうらり  
 声こゑうらう其その縁えんもさう引ひきさしてさふまをねとまき  
 づあふ人とまのねが。かちよがああの乳うち母ははあけり大ヤア  
 母はは人ひとまてか坐ましう。面かほ目めもあつめんめえ面目めあつとあ妻つま

くる。先まづの夜よぬの子こが捕とらめて狂まど気まかせんりとすぐるふ小こ。  
 跡あとをたたふてけいふふやうくと恐おそび入らうや彼所そこよと密ひそめ  
 けいわらう終すぞ。笑わらひさくやど昔悪あくの孝こう行ぎょうをそとぞが  
 継つぎひひは悪黨あくどうの弟あによと入いりて追おひきり子ともあわねる母はは  
 と親とありふて恨もせぞ陰どふ子こ少すくふ孝があらじ  
 あらうわのこあり勤いん当とうと邪見よ非ひ道どうをあらうくく。あ  
 身み小せう罪ざいのあらうやうふふをうけおて笑からうくと勿体あらう。  
 今いま身みよもつふ継つぎ子こを邪慳けんあらうくる天罰てんばつゆうあらと咽え

ぶぶと突つ込こ懐な刀は太た左さ急きゅう門もんを仰天てんあらうけらるあらよ  
 徳とく空くう門もんとあらふかどう兒双じゆう抱うまるをとらひのけうをあらひ  
 うふふ三子ごを添ておひ出せしもあらうくて其そのひとり。  
 そのうが子こ小せうけ育一いつ箇こ屋やの娘むすめ子こ孫まごともあらう  
 と可愛かわいさ百倍ひゃく憎にく嫌きらでも子をめてバ情なさけ心こころもあらうと笑。  
 そのとまとハ更さららるまと末ま期ごあらんで一いつツの形かたちひ天や  
 うを源げん十じゅう年ねんあらとか千ち代よの二に人にんが中ちゆう踏たふであらせて下され  
 や孫よ香をなけとども恩おんをなけらる主人しゆの娘むすめ子こたと之これ

暮でさうふらう。徒めども制さうが。一旦凍て死どを。  
 蕪生させらぬの子が情よよろこう。かやんもかやん有  
 ぬべしと。いつまで今さう源十舟。何と答さう。俯もち  
 らひてかろりしう。源十舟ふもそれのさうね重くの恩  
 人さまで。今ものぐる我身のう主人のさうがぬら  
 ち。何とも挨拶ありさうと。立ちる心ぞ頼し。死な  
 血まらの子ても孫ても。神の場ふてさうりし我娘を。  
 懐胎せて外より妻とめとさうさへまや。サア花形どの源

十舟どのの才芳して返答あまを。鏝えらうらげせぬら教  
 色源十舟と災免と。火どおて主の貞源次を忠ハ見ぬ  
 ありし。間よひとやうふ。源次。大々左衛門のひ  
 ぐ。娘やえと。鞠負よ妻せ源十舟我家を起さむ。徳右門  
 どの。実子の妹あまらる。是バ。姉のからよをひひしけて。  
 源十舟が妻とさう。彼が恩をもむ。乳母が切らる。心  
 やう。主の孝道もたらして。三方四方も全うん。か久ど  
 亦う。是が始とやせし。か。つげが。此場の始。



何とも拙者が發言とて手と拱て口と閉 **源十** 薄命の身  
 小恩を筭るるありとて 幾万人の救を乞ふとて  
 澄扱み 澄扱とて娘が懐胎をんを論るるやある  
 と勢ひ猛くまゝなる所へは家の手代を出花形源十と  
 名あり留因を徳あるさまにか目よかく度よりいふ  
 中さんと告せさるる人々をいづけける顔付るる  
**大** 何ともわはは所をいふまゝがひやどき徐く  
 出来るのみ爰に居る源十布小白容衣服大小いふる

まど寸分ちがぬ一對のつぎを真の源十布とさるる  
 今入事りし源十布とさるる下りて手とて  
 平伏ありて敬えかる **徳** 汝花形源十と名のり入るる  
 我従子源十の先よりあふわりの同名とい  
 衣服大小やせり女もたがらむとて孫といやとも  
 小の一人を狐狸妖怪 **源十** や此花太夫を誓ひたりし  
 源十とて私より **源十** さわふらん身 **源十** づつ小の身  
 せしる家とていふ **源十** かなんが妻の吾夫源十

源十

源十

ろしどごうやうたる。似せぬ源さぬ小娘をいひわたり  
 ことつそくすまば郎も来り。ぶるむさうひも俱小  
 売び**源次**めもやひるむ人あやう。源すの我聲小中受  
 と手ととまばあが先へと源す。何の叫と黙頭く二人  
 郎も来り此花う手を携乃て行よげる**源次**今郎も来り  
 娘の手を引。日ごろも似気あき幻のわりさま。ハテいふ  
 くれるゆどもどや**徳右**一ツ鏡二ツの面う。二ツみうる  
 二人の従子。シテ又免の用ありてや。はづろ小速よイガ

さんと藤立車すりよまじ**源十**神通をめて邪六を  
 ろしひとまば推よまき免りけその人あしてわんどもを  
 やさん。ハイもろろんか千代さゆのか情深くお夕の餅  
 食さん。さん露の命もやまくと此恩をうけらる。  
 安部野の狐てごごうやす**徳右**ヤ、**ちよ**をあらるまばうく  
 ええど狐でありしや。乳母もろろとまがう。這きて**玉**  
 ア、人間ううてまがう。や恩をあらての其術う**狐**ハア  
 やまのくまへまう形ろろりおるまの杖之日ごろの此恩

と報るふを。係すうさるふの縁を。いと。かえど。障が  
かゝるさるを。さくふの外を。おせんめと。さるま。とも。  
係すうさるのさより。浮か。あげき。川とけ。ふまを。沈め  
て。帯ひ。もたらぬ。おの。下ま。ちゆ。あよせん。手術。つぎ  
と。ま。勿。体。あ。も。あ。る。こ。よ。お。ら。う。ぬ。け。計。て。添。寐。の  
ま。実。中。さ。る。の。耐。々。疑。ひ。を。か。ま。ま。が。縁。の。切。わ。を。と。か。ふ  
ふ。さ。が。ふ。は。場。の。あ。る。と。ひ。情。を。や。一。度。が。二。度。と。い。ひ。さ  
り。お。ま。慕。の。情。み。ひ。り。さ。ま。で。此。畜。生。の。こ。も。も。あ。ら。ま。

孕するを。よろこぶ。良さを。ま。か。つ。て。澄。池。と。り。既。よ  
あ。ら。う。き。此。場。ゆ。ま。の。形。を。あ。ら。う。ら。う。云。は。る。ま。と。の  
承。り。あ。く。お。こ。ニ。ツ。ま。の。恥。ひ。て。異。変。の。と。も。さ。ら。う。ま。  
ま。と。現。在。室。の。其。人。の。あ。ら。は。ま。お。を。も。憚。ら。ま。お。  
名。形。を。さ。ら。う。一。大。胆。ハ。は。ら。ん。ま。ち。よ。さ。る。係。す  
さ。る。との。い。夫。婦。を。ひ。と。と。致。し。な。る。我。を。ま。よ。り。形。を  
あ。ら。う。一。下。度。古。泉。へ。ま。さ。う。由。と。郡。ま。泉。さ。る。小。さ  
か。る。さ。る。の。安。産。さ。せ。や。ま。で。あ。ら。う。く。か。糸。や。一。あ。ひ。や

えんと忽狐の姿をわすかす。一聲うらう鳴とひびく。  
 何処ともなくえぞうね乳母の弄ぶるげんや。完尔  
 するふが此世の別。まなくぬ抱をうらひど善心よかへる。  
 末期の祠をこそ。かちよを係十希小妻せめてたぐひ  
 或とさけるこそ。

大左衛門が身の納小猿手下の始末郡を恥かき  
 めのくろ。美理とのべ哀を催奇然三篇又著へ  
 園曙下之巻畢

編者

梅暮里谷我寶

畫工

溪齋英泉泉

文政七  
 甲申孟  
 春發行  
 書肆

大坂心齋橋筋博勞町南江入

河内屋茂兵衛

名書屋傳馬町三自御園町角

美濃屋清七

同京町通中市場町

美濃屋兵

江戸人形町通

鶴

同日本橋

砥

